

葉室西芳寺はむろさいほうじの林泉は、夢窓国師むそうこくしこゝに止錫の時、洛陽らくやう染殿そめどの地藏尊ちざうそん来現して土石を運び共に作り給ふ名園なり。其後

応仁の兵火に荒蕪せしを、伏見の島之助てふ者作り補ふといふ。〔図は築山庭造伝に見えたればこゝて略す〕原此寺は

むかし聖武帝しやうむていてんひやう天平年中、行基大士ぎやうきだいしの艸創にして伽藍巍々たり、年歳久遠にして大に荒なんとする時、摂州の太守かものかみ掃部頭

大江親秀ノチカヒデといふ人、当山の檀越と成て夢窓国師むそうこくしを請じて再興に及ぶ。

西芳精舎に御幸なりて両株の佳花を叡覧ありける翌日に奉られける

夢窓集　めづらしき君がみゆきを松風にちらぬ桜の色を見るかな

竹林院内大臣

御かへし

花ゆへに御幸にあへる老が身に千年の春を猶も待かな

夢窓

征夷將軍（尊氏）西芳寺の花ざかりにおはして法談の後歌読ける次に

自集　心ある人のとひくるけふのみぞあたら桜のとがを忘るゝ

同

文和五年三月西芳精舎の百韵連歌の中に

前句　道なほのこる谷のふるでら

菟玖波集

忘れじな見しはその夜の夢の窓

関白前左大臣

永徳二年九月十三日承テ三府君命ノヲ「赴ツ三西芳精舎紅葉会ノニ」云々、和漢聯句

日工集

松はたてぬきはもみちの錦かな

二条摂政殿

世をのがれて葉室といふ山里にこもりゐて

侍りけるに、花を見て読侍る

新勅

いざや猶花にも染し我心さてもうき世にかへりもぞする

前大納言光頼